

責任について、問い続ける — 四半世紀の対話から

高橋哲哉

2021/01/23

『断絶の世紀 証言の時代 — 戦争の記憶をめぐる対話』岩波書店、2000年

『責任について — 日本を問う 20年の対話』高文研、2018年

「責任」というテーマの共有

I. 「日本人としての責任」をめぐって

・「ナショナルなもの」への視角

シンポジウム「ナショナリズムと「慰安婦」問題」日本の戦争責任資料センター、1997年

『ナショナル・ヒストリーを超えて』東京大学出版会、1998年

「日本国民の皆さん、自分はたまたま日本に生まれただけであって「日本人」であるつもりはないとか、自分は「在日日本人」に過ぎないとか、どうかそんな軽口は叩かないでいただきたい。あなた方が長年の植民地支配によってもたらされた既得権と日常生活における「国民」としての特権を放棄し、今すぐパスポートを引き裂いて自発的に難民となる気概を示したときだけ、その言葉は真剣に受け取られるだろう。そうでないかぎり、「他者」はあなた方を「日本人」と名指し続けるのである。」（徐、日本の戦争責任資料センター編『ナショナリズムと「慰安婦」問題』青木書店、1998年、167頁）

・「敗戦後論」論争

「長い忘却を経て歴史の闇の中から姿を現わした元慰安婦たち、彼女たち一人一人の顔とまなざしは、「汚辱を捨て栄光を求めて進む」「国家国民」の虚偽あるいは自己欺瞞を、最も痛烈に告発する「他者」の顔、「異邦人」ないし「寡婦」（レヴィナス）のまなざしではないだろうか。この汚辱の記憶、恥ずべき記憶は、「栄光を求めて」捨てられるべきものなどではなく、むしろこの記憶を保持し、それに恥じ入り続けることが、この国とこの国の市民としてのわたしたちに、決定的に重要な倫理的可能性を、さらには政治的可能性をも開くのではないか。[中略]汚辱の記憶を保持し、それに恥じ入り続けるということは、あの戦争が「侵略戦争」だったという判断から帰結するすべての責任を忘却しないということ、つねに今の課題として意識し続けるということである。」（高橋、『戦後責任論』講談社、1999年、190頁・197頁）

「無限の恥じ入り」（加藤典洋） 「ごく当然な理性の言葉」（徐京植）

「時効なき羞恥」（鶴飼哲）

「高橋哲哉の論理はそのまま極限にまでつきつめると、いかなるナショナリズムも認めないところまで行きつくし、すべての民族集団、宗教集団の共同性を否定するところまで行き着かざるをえない。彼が勧奨するアジア諸国への謝罪にしても、論理的に言えば、加害国民である日本人から謝罪を勝ち取ったことを外交的得点に数えることをアジア諸国の政府に禁じなければならないし（それはそれらの国のナショナリズムを亢進させるからである）、「戦争責任・戦後責任を完遂しうるほどに倫理的に高められた国民的主体を立ち上げた」という意識をもつことを日本人には禁じなければならない（それはナショナルな優越感の表現に他ならないからである）。

原理的な正しさを求める志向はいずれ**おのれが存在すること自体が分泌する「悪」**に遭遇するほかない。そのときには「私が存在することが悪だというなら、私は滅びよう」という「結論」をおそらく高橋は肅然と受け容れる覚悟なのだと思う。

私の身体に「鳥肌」が立ったのはおそらくそのような「自裁の結論」に対しての生物学的な怯えゆえである」。(内田樹「卑しい街の騎士」、加藤典洋『敗戦後論』ちくま学芸文庫、2015年、366頁以下)

・「さまざまな分断線が、日本人と朝鮮人、男と女、加害者と被害者等々の間に引かれている。これを確認することは必要だと思います。「同じ人間ではないか」という「普遍主義」で、現にある分断を覆い隠すことはまちがっている。しかし、なぜ分断線を確認するかというと、なんとかしてそれを超えるためである、と私は言いたいのです。たとえば実感ということに関しても、学生から、私には韓国人の気持ちはわかりっこありませんという反応が出てきたりするのですが、それでも自分と相手とはどういう論理でつながれるのかという、まさに新しい尺度を求めなければなりません。正義という尺度によって他者とつながることができるという理念をおかない限り、断絶を超えていくことはできない」（徐、『断絶の世紀 証言の時代』179頁）。